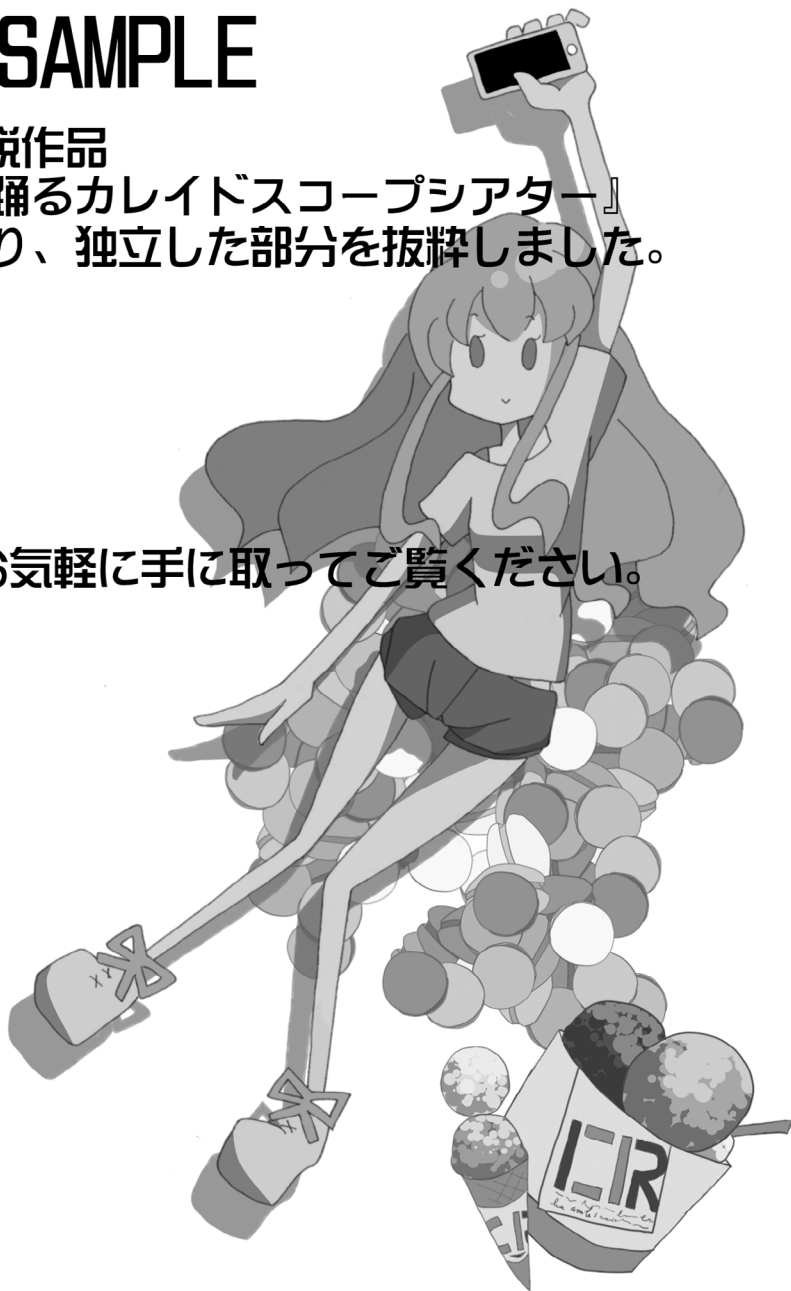


SAMPLE

小説作品

『踊るカレイドスコープシアター』
より、独立した部分を抜粋しました。

お気軽に手に取ってご覧ください。



六月二十一日(日)

今日、俺は初めてのセックスをする。

暗い赤紫色の照明に、白いシャツが染まった。ベッドの上に女の子座りをしている夏花の白い肌も、シャツと同じ色を見せていた。夏花は下着姿でそこに座っていた。彼女の肌の色とは対照的な、黒く装飾の多い下着だった。くびれたお腹から、服を着ている時には分からなかった女性らしい腰つき、しかし引き締まった臀部、そこから延びる脚線美——全てが現実とは思えないほど扇情的だった。けれど長くしなやかな黒い髪と、上気した頬に上目遣いの少女は確かに夏花で、俺は夢と現の間を漂っているような気分になった。

「……分かった、初めてなんでしょ」

彼女の声が、俺のことをぐっと現実を引き戻す。夏花というのは俺の幼馴染で、小学校までは同じだった。それ以来は学校も変わり、会って話すことはもちろん街

で見かけることも減ってしまった。そして今日、六月二十一日に偶然再会し駅の近くで夕飯を一緒にして、今に至る。

返答に困った俺は、夏花の言う通りなのであった。十六歳までに一切、そういうことを経験してはこなかった。それでも、こういう知識がないわけじゃないのだ。

「……うるさいな。夏花こそどうなんだよ」

「……内緒っ」

認めたくなかったけれど、俺はやつと彼女がバージンでないことを受け入れた。もし彼女も未経験であったなら、俺のことをホテルに誘わなかっただろうし、無人のフロントでスムーズに受付を済ませたりはできないはずだ。それでも少しシヨックだった。夏花は俺の——初恋の相手だったのだから。聞こえないように舌打ちをしてから、俺は夏花の横に座る。

横目に見る夏花の肢体が幼い頃とは似ても似つかなくて、俺の心臓は高鳴った。鼓動があまりに早くって、ベッドごと揺らしてしまうのではないかと少し不安になる。そんなことを思う自分が情けなく思えた。

「……ね」

それだけ言って、夏花は俺のシャツのボタンに触れる。思わず前に出た俺の右手に下着の固い感触が触れ、その先の柔らかい弾力をほのかに伝えた。

「お、おい……」

「コーイチ……しないの?」

自分の名前を呼ばれて俺は、言葉を失う。夏花はその隙と言わんばかりに俺のシャツのボタンを全て外して、ベッドの上にシャツを落とした。次には夏花の顔がぐっと近くなり、吐息が頬を撫でた。彼女は俺のズボンのベルトを緩めた。俺の意識が下に向いていたからか、夏花は俺に不意打ちでキスをした。

そのまま、夏花は俺のことを押し倒した。重ね合った唇を離さず、息が苦しくなったことに彼女は舌を入れて来た。唇の瑞々しい感触も下のざらりとした質感もねっとりした唾液も全てがあまりに生々しくて、俺は目を瞑った。そうすると他の感覚が鋭敏になって、俺は自分の体が熱くなるのを感じた。

「……ふはあっ」

唇を離れたとき、俺は目を開いた。夏花がじつと俺のことを見ている、口づけの間も彼女はじつと俺のことを見ていたと分かった。

「な、夏花……」

「コーイチ、結構ウブなんだね。すっごく可愛いと思うよ、そういうの」

夏花のその笑顔は、俺の知らない笑顔だった。同い年なのにも関わらず、艶やかで大人に見えた。

その後、俺は横になったまま夏花に導かれて彼女の下着を外した。夏花は慣れた手つきで俺の服を脱がせた。吐息の熱と衣擦れの音が、再び俺を現実から引きはがす。そして今度は俺の方からキスをした。歯がぶつかって、少し痛いのを謝ると、夏花は笑顔で口付けを返して来た。顔を離すと、目の前には夏花の薄桃色が見える。灯りの色に染まった肌を抱くとあたたかくて、柔らかくて、俺は「そう」なるのを我慢できなかった。

「……硬いね。コーイチはさ、どうしたい?」

「えっと、その……」

夏花の柔肌を前にしても煮え切らない態度の自分が、

情けなくてどうしようもなかった。自己主張の激しいのは俺の心よりも、体の方であった。

夏花は甘い息を吐いて、細く冷たい指で俺自身に触れた。その刺激に耐え切れず、俺は自分でも出したことのないような声を出した。

「いいもの、あるんだ」

あまりに耳元に近くて、夏花の声が直に触れた。夏花は俺に直前で『おあずけ』をして、ベッドの上に散乱している服の中からスマートフォンを取り出した。

「キめて、してみよ？」

そして俺は言われるがままに、電子麻薬『アンリミテッド』を使用した。夏花も同じアプリを使用していた。彼女は他にもいくつかの錠剤を飲み込んでいたが、俺は見ないふりをした。

六月二十二日(月)

「ねえ、コーイチはえっち好きになった？」

俺の隣で、起き抜けの少女はそう問いかけてくる。上

目遣いで上気した桃色の頬が色っぽかった。余りに顔が近くって、吐息の熱まで感じていた。ホテルにほんのりと残る蜜の香りは、情事の余韻。

彼女の声に、一夜の出来事を思い出す。スマートフォンでキめる最新のドラッグ、『アンリミテッド』のもたらした浮遊感と非現実感が脳裏に蘇り、俺は夏花から目を逸らしながら「……好きに、なったけどさ」と中途半端な調子で答えた。

俺はすっかり抜けていた。今までドラッグをやったこととはないため、今の感覚が正しい『抜けた』というものは分からなかったが、現実には『戻ってきた』という感覚があった。自分がどんな状態だったか分からなかったけれど、普段の彼女からは想像のつかない高揚した姿が、本当に麻薬に手を出していたんだと納得させた。『アンリミテッド』というのは一見ただのアプリだったので抵抗はなかったが、こうして思い返すとひどい罪悪感に苛まれた。

「夏花はさ、『アンリミテッド』にハマってるのか？」

「うーん、そうかも。タダだし、本物のクスリじゃな

いから捕まることないしね」

あつげらんかんとした口調の夏花に、俺は彼女をひどく遠く感じた。

「そっか、俺ばっか子供だったんだな」

「別に、えっちしたから大人ってわけじゃないじゃん。外国の子供で、私よりもずっと早く子供を生む子だっているんだよ」

そう言っ、夏花はふふふと笑う。布団の隙間から夏花の白い肌がのぞいて、俺は思わずどきりとした。した後にもそのまま寝てしまった俺たちは、二人とも裸だった。夏花の本当の姿を知ってしまったショックよりも胸の昂ぶりの方が大きくて、俺の体は正直だった。

「ところでさ、学校行かなくていいの？」

「学校ー？ 最近はあるま行っていないかなー。別にどうでもなるしね。っていうかさ、それならコーイチの方がやばくない？ コーイチのとこ、厳しいでしょ？」

「いいんだよ、先公だっ、俺のこと気にしてねえし、親だっ、何も連絡をよこしやなかった。お前とこうしてる方がずっ……生きてるって感じがする」

「何それ、おーげさ」

夏花の言う通り、自分でも大げさだとは思っていた。それでも退屈な日常よりかは、こっちの方が楽しいさ。

布団から半分身を出した夏花は片手に収まるくらいの乳房を隠そうとはせず、何事もなかったかのよう梳った。その仕草がとても扇情的で、俺はそんな彼女に見られていた。

「なに見てんの？」

いきなり声をかけられて、俺は言葉に詰まってしまった。すると夏花はまたはにかんで、ふわふわとした可愛らしい声で「もしかして……またしたい？」と上目遣いで誘ってきた。

本心では彼女の誘いに乗ってもう一度したかったけれど、他の男にも同じことを言っているのかと想像すると、そういう気分にはなれなかった。

「ふーん、意外。でもさ……」

彼女は誘うような目で頬を寄せてくる。冷たい肌の温度が、俺の胸を熱くさせた。柔らかい唇で、夏花は俺の首筋にそっとキスをした。

「あたしはまた……したいかな」

「そんな風に言われたら……そりゃ……」

結局、俺はまた電子麻薬をキめていた。二度目の方が効きはよく、今度は俺の方から何度も何度も夏花を犯した。俺が三回目に達した時から、余計なもののはつけなくなった。

六月二十三日(火)

そのさらに翌日。無断で外泊してきたにもかかわらず、親は俺のことなど気にせずいつも通り仕事へ行った。俺の方もさしたる変化はなく、惰性のまま学校へ向かう。

半分呆けた調子で午前中の授業を終え、俺は担任に呼び出された。昨日の無断欠席についていくら尋問されたけれど、言い訳はすらすらと出てきて、十分後には担任を納得させることができた。そのまま話は続き、サボりとは関係のない話になった。

「お前……、どうするんだ。もう六月も終わるつてのにふらふらと部活もやってないし」

できごとのせいで気分が悪く、余計に退屈だった。カラオケに誘われたのを断って、俺は寄り道もせず家に帰った。

玄関で靴を脱ぎ、きちんと揃えてから自分の部屋へ直行する。「ただいま」と言う相手は家のどこにもいなかったが、ただ習慣的に口にしていった。

部屋の扉を開ける。カーテンは閉まっていたし、電気も消していたので真っ暗だ。そのまま電気は点けずにベッドの上に座った。ポケットからスマートフォンを取り出すと、液晶画面の光が妙に明るく感じた。

そのまま、無気力に横になった。俺のベッドは反発が少くないものだったが、その分自分の体重が支えられているという感じがした。

「……母さんも父さんも、今日は遅いんだっけか」

何の気なしに呟いてみる。そしてすぐに「いや、今日もか……」と続けていた。

目を瞑ると、情事の記憶が蘇る。肌を通して伝わる体温、荒く熱情的な吐息、二人を隔てる少しの汗。シーツ

ジャージの担任は、いかにも真剣そうな顔で俺を見据えた。その顔がすごく暑苦しくて、俺は担任と目を合わせるのをやめた。

「知りませんよ。でも俺、中間の点数だって十番以内だったでしょ？ そんな感じでテキストに過ごして、高三になったら受験勉強しますよ。親が大学行けっつてうるさいんでね」

「高津！ いいけど、そんな高校生活空しいだけだぞ？ 入るところがないんだつたらうちの野球部に……」

担任は思わず顔を背けたくなるような大きな声で、自分が顧問をしている野球部に勧誘してきた。無視するのでもできそうにないので、俺は適度に頷いて区切りのいい頃に、「昼休み終わるんで」と言っつて職員室を去った。

教室に戻ると周りの連中から「何やらかしたの？」や「まだ一学期なのにサボるとは、期待できるねえ」などと面倒くさい質問責めにあつた。邪険にならないようにあしらっている、昼休み終了のチャイムが鳴り、それぞれ自分たちの席に戻って行った。

午後の授業も変わらず退屈だった。いや、昼休みの

を握り、全ての感触が俺の内から湧き戻ってくる。

「……くそっ」

何故か、悪態をついた。俺はズボンのベルトを緩めて、そのまま床へ脱ぎ捨てた。

「……はあっ」

スマートフォンのメニューから、『アンリミテッド』のアイコンをタッチする。

ドラッグアプリ、アンリミテッド——それは低周波と幾何学的な映像の連続が表示されるだけのアプリだ。スマートフォンに記録されている写真や、メールの言葉遣いや、アプリから読み取れる趣味趣向を自動でスキャンし、使用者にもっとも効果的なパターンを表示する。

使用者は何も考えず、そのアプリが起動するのを眺めているだけでいい。催眠状態へ陥り、麻薬のような快感を得ることができる。

どこから配信されているのか誰が製作したのかなど全てが不明だが、無料アプリのそれは、若者の間で瞬く間に広まったようだ。配信されたばかりのそれには法的な規制も存在せず、俺たちはメールを打つよりも手軽に卜

リップすることができる。

起動するとすぐにきいいんと、耳鳴りが始まった。入り口は嫌悪感だが、たちまち耳は慣れてしまう。そのまましばらく画面を眺めていると、自分の意識が段々と幾何学的なアニメーションに奪われていく。

やがて、動悸が速くなってくる。動いたり走ったりは一切していないのに、自然と息が上がってくる。視界が一度ぐにやりと回転し、吐き気と快感が同時に襲ってきて、すぐに高揚感が勝利する。ここまでくれば、俺はもうとろけている。いわゆる『ハイ』な状態だ。

初めてのセックスの名残に任せて、俺は獣のような時間を過ごした。精を吐きだしてからもドラッグは抜けず、一時間以上横になっていた。

「何だよ……これっ……」

その虚無感は、自分が『戻ってきた』という感覚と一緒にやって来た。昨日とは丸きり違い、俺は自分が奈落の底から闇を見上げていると錯覚した。

「死んでしまいたいくらいだ」

ひたすらに空しく、自分が気色の悪い愚かな抜け殻にしか思えない。もう一度アプリを起動すればそんな憂鬱も吹っ飛ばのだろうが、それさえも億劫だった。

「夏花……」

寝ることさえも許されない空虚な気持ちのまま、俺はベッドに横になる。時間の感覚が曖昧だったけれど、空腹に今が晩飯の時間だと告げられた。

「面倒、臭いな」

言いようもなく気怠かったので、俺はそのまま横になった。

Thank you for reading!

続きはHPでも公開予定ですので、興味があればぜひどうぞ！



制作：飯田 泰貴

MAIL: twilight_cs@gmail.com

HP: <http://akeo.yu-yake.com/>

twitter: @twilight_cs

